

編集後記

編集長(ダン シロウ)

相変わらずコロナ禍真っ只中である。いつか抜けたとしても、それはポストコロナの時代。以前に戻るわけではない。

東日本大震災原発事故の時、被災地からたくさんの家族が避難した。そして数年、新たな場所での人間関係や仕事、子ども達の成長が当然あった。そこで突きつけられたのは、いつFUKUSHIMAに戻るのか、あるいはそれ以外の選択をするのか。

禍の後遺症としてではなく、変化した新たな時代と、どう向かっていくのか。相似形だなと思って見つめている。

このマガジンのスタートは、先細りの紙媒体出版の時代に対する、webマガジン(フリー)という新形態提案だった。だから10年を超えて続いたところがあっただろう。

そして第二期といってもいい変化が今、千葉編集員や大谷編集員が編集後記に書いている複数の展開だ。

*

連載中の村本邦子さんの「周辺からの記憶」が本紙掲載原稿とは別の内容、2頁コラム形式で執筆され、国書刊行会から出版された。(詳細は村本頁のまえがきを)

私は頼まれて扉イラストを二十五枚描いた。装丁デザイナーがそのイラストを使って仕上げた表紙がとても上品で良い。その効果もあって(?)朝日新聞の書評欄に取り上げられ、なかなかいい書評になっている。ぜひ読んでみてください。

他にも連載陣の中に書籍化の打診を受けている方がいる。創刊時に目論んだことが、いろいろ発展的に実現してゆくのは、編集長として嬉しい限りだ。

編集員(チバ アキオ)

『ジェノグラムを活用した相談面接入門 ~家族の歴史と物語を対話で紡ぐ』(中央法規)を早樫一男先生、寺本紀子先生と共著で出版する機会をいただきました。お二人の先生、出版社のご担当者様大変お世話になりました。出版に至るまでは、数回にわたって京都、石川、東京をオンラインでつないでミーティングを重ねました。本を作る過程、先生方が支援に挑む姿勢、出版社さんが社会に本を届ける思いなど知らないこ

とにたくさんふれることができました。ジェノグラムをいろんな場面で使うようになって、私ですら20年。いつもとても役に立っています。私の手元にも数冊ありますので、必要な方がありましたらお声がけください。



コロナ禍での子育て。2年目。地球上の誰もが2年目。これも試行錯誤。できることは何だろうと考える。心理学では「リスクテイキング行動」と整理されてきたことを知ると、見えない、知らないリスクを正しく知る難しさに直面している。ワクチンのすぐそばで働いていても打たない選択をした人にも複数であったし、越境したらバイ菌扱い、濃厚接触者「疑い」でも接した人に謝罪をしなくてはならなかったり、どんどん分断が進んでいる。そんな中で、「家族をテーマにした事例検討会」を2001年から毎月開催で継続してきたが、コロナ禍に対応してオンライン版スピノフとして「となりの事情」として月1回援助職オンラインミーティングを行ってきた。それが丸1年を迎えた。オンラインだからできること、今だから共有していること、その可能性も感じている。止まる、失うだけでなく、新しい出会いもエネルギーになること、それが誰とかがその出会いの質は何かまで考えると、新しい経験の中に可能性も感じている。そんな話でもマガジンでまた機会を見つけて書きます。

編集員(オオタニ タカシ)

45号の発行から3か月の間で、第2回目の対人援助学マガジン読書会が開催され、先月には対人援助学マガジン執筆者トークライブもスタートした。44号の編集会議で読書会の話題が出たところがスタートなので、半年の間で2つの企画が既に形になったことになる。これは結構なスピード感だと思う。

仕事ではなかなかこうはいかない。その理由のひとつに“費用”があるだろう。何か企画をやるのであれば、人が集まってくれないと費用対効果が合わない。人を集めるために、企画をどう練るか、広報をどうするか…と実施する前から検討事項があふれてくる。広報は力を入れればそれだけ費用が増えるという側面があるので、どのような方法で、どのような対象にア

アプローチするか…という吟味も必要になってくる。はっきり言ってキリがないし、どれだけやったとしても人が集まるかは、開けてみないとわからない。

マガジンが経済的な理由による廃刊と無縁であるのは、Web発行であるという点も大きい。今回の読書会やトークライブも、オンラインミーティングという選択肢ができたからこそ、これほど短期間で具体化できたとも言える。新型コロナの感染拡大によって私たちの生活に「オンラインミーティング」というツールが組み込まれ、社会インフレとして整ってきたことが、これらの企画の実現を後押ししたと言うこともできるだろう。

トークライブは盛況であったが、課題もあった。前半のトークの後、なんとなく慣れ親しんだ研修会方式の質疑応答のように進行してしまったことである。その場で編集長から待たされたが、残された時間を手探りで進んでみたところで初回を終えている。単なる知識の獲得や、おおよそ予測の範疇を出ない質問や意見の交流が生じるだけであれば、従来の研修会で事足りている。小さくても、何か変化を生じさせることを目指して、引き続き試行錯誤を続けていこうと思う。

■ご意見・ご感想■

マガジンに対するご意見ご感想は
danufufu@osk.3web.ne.jp

マガジン編集部

604-0933 京都市中京区山本町438
ランプラス二条御幸町402 仕事場D・A・N

対人援助学マガジン

通巻46号

第12巻 第2号

2021年9月15日発行

<http://humanservices.jp/>

第47号は2021年12月15日
発刊の予定です。

原稿締切2021年11月25日！

執筆者募集

本誌は常に書き手に門戸を開いています。新たなジャンル

からの、執筆者の登場に期待します。

自身の生活スケジュールに本誌「連載」を持ち、継続的に、自分だからこそ描ける分野の記録を発信したいという方からのエントリーを待っています。

ページ制限なしの連載誌です。必要な回数も、心置きなく書いていただけます。ご希望の方、編集長まで執筆企画をお知らせ下さい。

執筆資格は学会員であること。 現在非会員で書いていただく事になった方には、[対人援助学会への入会](#)をお願いしています。

対人援助学会事務局

540-0021

大阪市中央区大手通2-4-1

リファレンス内

TEL&FAX学会専用 06-6910-0103

表紙の言葉

双子の事を考えたことなんてなかった。小学校時代、一学年下に近所の魚屋の双子兄弟がいたがそう関心はなかった。

心理学専攻の大学に入って、双生児の研究というものに触れた。なるほど人間の成長や、行動選択分岐の実験の対象ではあるなと思った。でもそういう見方にも、本当のところさほど興味は持てなかった。

双子が気になるようになったのは、実際にケースとして出会うようになってからだ。

必然のように、常に比較され続ける人生。なかなかのストレスだろうと思うが、一方、こんなに近い他人がいる人生もない。

双子って、本人はもちろん、両親も意図して選ばないで起きる大事だ。

自分の人生はそんな巡り合わせには会わなかったのが、本当のところは、知らないままでこの歳になっている。

団士郎 (2021/09/15)